

ゼロから考える少子化対策プロジェクトチーム第1回会合

1. 日時 平成21年2月10日(火) 17:00~19:00

2. 場所 内閣府庁舎5階 特別会議室

3. 出席者

安藤 哲也	NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事
勝間 和代	経済評論家
松田 茂樹	第一生命経済研究所主任研究員
宮島 香澄	日本テレビ報道局解説委員
佐藤 博樹	東京大学社会科学研究所教授 (少子化社会対策推進点検・評価検討会議座長)
三浦 展	カルチャースタディーズ研究所主宰
山田 昌弘	中央大学文学部教授
金子 隆一	国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長

4. 議事要旨

川又参事官

お待たせいたしました。ただいまから「ゼロから考える少子化対策プロジェクトチーム第1回会合」を開催いたします。

本日のテーマは「恋愛・結婚」となっておりまして、本日は、ゲストといたしまして、中央大学教授の山田昌弘様、カルチャースタディーズ研究所の三浦展様をお招きしております。また、客観的なデータの補足の説明をお願いしております国立社会保障・人口問題研究所の金子隆一様でございます。

会議の開催に当たりまして、少子化対策担当大臣の小淵大臣からごあいさつを申し上げます。

小淵大臣

どうも皆様こんにちは。今日は、お忙しい中ありがとうございます。

今日はゲストとして来ていただきました山田様、三浦様、金子様、どうぞよろしく願いいたします。

皆様からいただいた資料を事前に、大変興味深く読ませていただきまして、今日、どんな議論になるのか、また、皆様方からどんなお話を伺えるのか大変楽しみにしております。

少子化対策を考えるに当たって、これまでは保育所の整備など産んだ後の話が多かったんですけども、これからは、やはり恋愛や結婚といったところもしっかりと考えていかなくてはいけないのではないかと考えています。

我々のPTでは、誰もが少子化問題というものを我が事として、未来の子どもたちに向けて何ができるのかということを考えていきたいと、このPTを立ち上げた次第です。

大変短い時間ではありますが、忌憚のない意見交換をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

川又参事官

それでは、議事に入りたいと思いますけれども、この会議の運営に関して、本会議は、原則公開でございます。また、会議の終了後、議事録を作成し公開することとしております。

なお、本プロジェクトチームの議事進行につきましては、毎回、各テーマごとにこのプロジェクトチームの委員の中から担当者を決めて準備し、また、運営を行うという方法を取らせていただいております。

本日の「恋愛・結婚」というテーマにつきましては、佐藤委員の方に御担当をお願いしているところでございますので、以下、佐藤委員の方から進行をお願いいたします。

佐藤委員

今日の進行を担当する佐藤です。よろしくお願いいたします。

1分だけ時間をいただいておりますので、今日の閣議の後、大臣が記者会見のときに、何で少子化対策で恋愛や結婚を取り上げるんだという質問があったそうです。多分、こちらのテーブルに座っている方はみんな理解していると思うんですけども、一部、もしかすると、後ろの方で「何で？」と思われる方もいらっしゃるかと思いますので、少しだけ説明させていただきます。大臣が言われたように、従来の少子化対策というのは、結婚したカップルが子どもを持ちたいという希望があるけれども、なかなかそれが実現できない、希望がかなわない。希望の実現を阻害する要因があるとすれば取り除くものが主でした。例えば、保育園に預けにくいから2人目は無理だとか、職場環境が整っていないととても1人も2人も無理だとか、こうした阻害要因を取り除いて、希望が実現できるようにすることでした。実は、もう一つ大事なのは、男女が出会い、お互い好きになって、結婚しようと思って、家庭を築けることです。しかしこれまでの少子化対策はその後に関するものなのです。

ところが、この前半の対策がすごく大事になってきています。なぜかということ、未婚化、晩婚化がすごく進んできています。未婚では子どもは当然持ちにくいですし、晩婚化でも、結婚の時期が遅れますと、やはり子どもは1人で、2人はなかなか難しいということになると思います。この恋愛・結婚の部分が少子化をすごく押し上げています。他方、未婚の人も、多くの方は結婚したいと思っています。結婚したい人たちが、なぜ出会ったり結婚できないのかということを中心に議論して、従来の少子化対策と同じように、結婚したい人が結婚することを阻害する

要因があるとすれば、それを取り除くということを、政策として取り組む必要があるのではないか。そこを議論してみようということです。

そういう趣旨で第1回の入り口としてこのテーマを設定させていただきました。

まず、お三方に御報告いただいて、その後議論して、その議論聞いていただいています。後ろの方も質問したいというのが出てくるとお思いますので、この委員会は、ただ全員にというわけにはいきませんので、それは私に選択権があるというふうにさせていただきたいと思いますが、最後、皆さんにも、この今日の報告者の方に御質問していただく時間をとりたいと思います。その後、また記者会見するというような形になるかとお思います。

それでは、まず、三浦さんの方から御説明を。全部「さん」づけでいきたいと思しますので、ごめんなさい、三浦さん、よろしく願いいたしたいと思います。

三浦氏

三浦でございます。よろしくお願いいたします。

事前に資料が配付されておりましたので、皆さんざっとごらんいただいているという前提で、データも多うございますので、簡単に御説明いたします。

これは、来週末に文春新書で出る『非モテ!』、“モテない”という本のデータを御用意したもので、本邦初公開でございます。来週発売でございます。そこからの幾つかテーマをくくりながらデータを切り貼りしてきました。

まず、結婚する上で「三高」ということが昔よく言われましたが、実際、「三高はあるのか?」ということをお私がおこれまでやった調査から見てみますと、まず、収入との相関、左上ですね、これはやはりある。特に35歳~39歳がわかりやすいですが、年収に比例して結婚率は高いと。それから、その下、年収を規定するのは、現在は特に雇用形態になるわけですが、正社員と派遣社員とフリーターを比べますと、正社員の未婚率は、これは全国平均、国勢調査の数字とほぼ同じなんですけれども、派遣・フリーターは年をとってもなかなか下がっていきにくいという結果がございます。

それから、右上、三高のもう一つが身長でございますが、これは、「身長が高いと結婚が早い」と書いてございますが、実は、すごく高い人と低い人の差があるだけなので、その間の人はそう変わらないので、そんなにすごく相関はないようであります。

ただし、これは私も驚いたんですが、年収と身長が比例しております。これは、つまり何というか、まだちょっと自分でも疑わしいかと、自信がないんですが、そうっております。

次が、モテる男性が近年、女性を独り占め傾向にあって、それこそ非モテの人はなかなか女性とめぐり合わないといいますが、そういうことが言われるんですけども、その辺をちょっとまとめてみました。

まず、左上ですが、モテたい気持ちですね。これは非常にきれいですが、年齢差がないんですね。死ぬまできっと変わらないのではないかとお思います。

それからその次、ただし、やはりみんなモテたいんだが、容姿への自信やモテ度と結婚の比率

を見ますと、「どちらでもない」ような人が結婚が早い。容姿に自信がない人はやはり遅い、それからモテない人は遅いんですが、逆に、容姿に自信があったりモテたりすると、ちょっと未婚が高いと。ずっと遊んでいられるということですね。

それから右上、やはり正社員と非正社員別に見ますと、面白いんですが、容姿に自信がある人とかモテる人は変わらないんですけども、やはりモテない、自信がないという人は非正規が多い。正社員は、どちらでもないとか中間が多いので、何事につけても、やはり正社員になる男性というのは、可もなく不可もなく中間的でございます。

それから、非正社員率を見ますと、モテる人とモテない人ですが、やはり男性の場合、モテない人が非正社員率が高い。女性は余り変わらないというか、むしろモテない人の方が非正社員率が低いんですけども、これはケータイでやった調査ですので、また一般の調査と少し違うかもしれませんが、モテる若い女の子、「ジェネレーションZ」というのは15歳～22歳ですけども、若い女の子ですと、モテる子は、話題のキャバクラ嬢とか、タレントになりたいとか、正社員になりたがらないというのも影響しているかもしれません。ちょっとモテないぐらいの方が、地道に正社員になるということかもしれません。

それから、モテる男女は、やはり性体験が多い。これを男女差で見ますと、やはり男性はモテる人、モテない人の差が非常に大きい。女性はさほど差がないわけで、ここから推察するに、やはりモテる男性が、いろいろな女性と体験しているということになるだろうと思います。

容姿への自信も同じような傾向で、男性はすごく差が大きいです。そういう意味で、モテる男性の独占という傾向はあるだろうと。

次に、モテる、モテないといわゆる階層問題が関係するかということですが、左上、学歴との相関は余りございません。「Y世代」というのは、今回ここでは25歳～32歳、ロスジェネに近い人たちですが、唯一女性の高学歴者で、私はモテるという人がちょっと多いようでございます。ということは、女性で4大に進学していくとモテ度が上がって行って、逆に言うと男性を見る目が厳しくなっていくという点があるのではないかと。

それから、右ですが、学校のレベルとの相関はあります。学校がレベルが高いという人ほど、容姿に自信があったりモテたりする、あるいはモテない人が少ない。

それから、左下、勉強の好き嫌いとの相関も若干ございます。

それから、一番はっきりしているのは家の経済状態との相関で、例えば、Y世代の男で経済状態がとても悪いという人は56.2%がモテないと回答するというように、やはり経済の問題は大きいという気がいたします。ちなみに、これは若い世代なので、ほぼ親元にいる人が中心ですので、この家の経済状態というのは、自分のというよりは、主に親と考えられます。

次です。「モテる男は三低なのか?」。先ほどは三高と言ったんですが、最近「三低」という言葉があるそうです。「低リスク、低依存、低姿勢」という、つまり、私のように自由業で、いつどうなるかわからない仕事をしていないと。それから低依存、これは、家事とかそういうものを女性に押しつけず自分でもやると。低姿勢は、上から目線で見ないということだそうです。

最近、私の知り合いがお嬢さんに説教したら、お嬢さんに「何、その上から目線?」って言わ

れたそうで、「親だから上から目線に決まってるだろ」と言って反論したという面白い話がありましたが、男だから女に対して上から目線と、これは許されないようでございます。

ちなみに、私はどちらかというと三高なんですけど、三低については、低依存のみ当てはまっておるので、今未婚だとちょっと厳しいなと。昔生まれてよかったなと思うわけでありませけれども。

では、モテる男というのは、自分でモテると思っている人は自分をどういう性格だと思っているかですが、「礼儀正しい」、「空気が読める」、「忍耐力がある」などとなっていて、そういう項目は、やはりモテない人では低い。逆に、モテない男性で多い性格は、「だらしない」とか「1人であるのが好き」とか「人の後についてゆく」とか、そういうものであります。

モテる女性の方、男女差は余りないんですけども、やはり「空気が読める」、「礼儀正しい」、「責任感」などとなっていて、モテない女性は、やはり「人の後についてゆく」とか「目立たない」とか、まあ地味な感じですね。モテることに関する性格との関係はそんなに男女差はないと。むしろ、男女ともにモテる人とモテない人の関係がはっきり出ていると。

それから、左下ですが、今回こういう本を書いた一つのきっかけは、昨年の秋葉原での事件ですけれども、あそこで容疑者の彼が、モテないとか顔が悪いということを非常に綿々とケータイに書いていたんですが、そういう破壊衝動のようなものとの関係を見ますと、やはり「人を見返したい」とか「何かを壊したい」とか、こういう欲求が強目に出ます。

ちなみに、きのうNHKでオレオレ詐欺のNHKスペシャルをやっていましたが、あそこで出てくる若者、男性が、やはり人を見返したいとか、規則はどうでもいいとか、良心の呵責は一切感じないとか、そういうことを言っていましたけれども、彼らがモテるタイプかモテないタイプかわからないんですけど、そういう反社会的な欲求というものがどういう人に強いのか。単にお金がないということもあるんですけども、モテとも関係するようだと。

それから、右下が経済状態が悪いと答えた人がどういう人で多いかをソートしたのですが、Y世代の短大卒、Y世代の失業者、Y世代の階層が下の人になっていまして、その次に容姿への自信とモテないというのがあります。ですから、こういう経済とか学歴と同じぐらい、容姿やモテが、山田先生の言う希望格差と結びついていると言えるのかなと。

それから、右の方ですね、これちょっとややこしいんですけども、女性にモテる男性、あるいは女性にモテる女性というのはどういうものかを、それぞれ男女に聞いたものです。ちょっと数字がややこしいんですが、これは何が言いたいかというと、一番右の列だけ見ていただくといんですが、1.5とか1.9とか1.7とかとありますのは男女比です。つまり、男性が考えるモテる男性と女性が考えるモテる男性の差が大きいものなんですけど、これは、「空気が読める」とか「仕事ができる」とか「笑顔が素敵」とか「ほめ方がうまい」とかございまして、あと「努力家」、「まじめ」も意外にあるんですけども、やはり男性が思っている以上に、女性が男性に期待するものというふうに読めるのが「空気が読める」とか「仕事ができる」とかというものであると。

右は、女性にモテる女性です。これも男女差の大きいものを見ると、やはり「空気が読める」とか「ノリがよい」とか「ファッションセンス」とかとあるんですけど、値が2倍、3倍とありま

すのは、「人にこびない」、「話題が豊富」、「仕事ができる」、「仕切るのがうまい」ですね。つまり、これは女性が考える女性にモテる女性が、男性のそれよりも非常に多いというものです。つまり女性が考える女性にモテる女性は、男性的で、リーダー的で、いい先輩、いい上司みたいなものである。

しかし、男性の考える女性にモテる女性の方は、どちらかというとおしとやかとまではいかないのですけれども、いわゆる女性的な女性であるという、男女の差があります。

それから、その下、モテる男性は表現力があるとかコミュニケーション力があるとかと言われるんですが、そのコミュニケーション力というのは、積極的に自分を表現する力なのか、あるいは人の言うことをきちんと聞いたり思いやったりする受信的な力なのかということを見てみたんですけれども、確かに「自己主張する」というのは、どちらかといえばモテる人で男女とも多いんですが、それよりも「面倒見がよい」、「人を思いやる」という共感力の方が差が大きいのかなと。つまり、モテる人というのは、やはり人を思いやったり、人の話を聞いてあげたりできると。モテない男性は「自分の話ばかりする」、「彼女の話聞いてあげない」なんていう不満が女性によくあるそうですけれども、そういうことを裏づけるものかなと。

それから、次のページが、こうやっていくと男性がもっと変わっていかねばいけないんだということになるんですけれども、今回の本は、余りにも男性がかわいそうなので、もうちょっと男性を応援したいなという結論に持っていったんですが、やはり男女ともすごく理想が高いと申しますか、右の方ですと、男性の方は、やはりやさしい女性、明るい女性を求めているんですけれども、自分は「やさしい」と答えた女性は15%しかいないので、なかなかやさしさを期待すると結婚できないということになります。

左の方は、逆に女性が男性に求める条件ですが、これは未婚と既婚で比べてみたんですが、面白いのは、既婚の人は「よく働く」が急に増える。「健康」も多いんですね。だから、元気でよく働く男がいいわよということになるんですが、未婚の方は、やはりどうしても「やさしい」とかいう条件になってまいります。

「女性が男性にやさしさを求めている」という声は、今よく聞こえてくるしメディアにも出ているんですが、男性も勿論、女性にやさしさを求めていて、かつ女性はやさしくない。この辺がちょっとなかなか難しい問題でございます。

それから、左下は、社会学で言うオムニボアという文化的雑食性ということにかかわるかなと思っつつくってみたものなんですけれども、適齢期直前の女性と男性の趣味を階層別に比べた場合、女性の方は、上流になればいろいろな趣味が増えるけれども、男性は趣味が増えないと。それから、ドライブ、カラオケのような男性的な趣味も、今や女性の方がたくさんしていると。勿論、クラシックとかも女性が多い、ファッションも多いよ、ヨガも多いよということでもあります。では、女性で、下流な方ほど多いのは何かというとB級グルメと漫画とアニメとギャンブルということになります。ところが、男性については余り階層差なく、漫画、アニメ、ゲームなんですね。

つまり、女性というのは、階層によって趣味も多様になりアップしていく。男性の方は、上流でも、やはりゲームであるとか下流志向である。女性はやはり上流志向である。そうすると、い

い大学を出て、いい会社に勤めて、所得も高い女性は、どんどんいろいろな多様で高級な趣味を持っていくのに、男性はゲームばかりだとなると、話が合わないわけでありまして、これはもう、ヨーロッパの貴族でも持ってこない結婚相手がいないということに、冗談めいて言いますと、そういうことになります。

それから、7ページ、これはちょっと後先でしたが、さっきのプレゼンテーション力ですね。これが思ったほど歴然とした差は出なかった。モテない人の方がやはりプレゼン力が足りないとは言えますが、先ほどのこの共感力、人を思いやるみたいな能力の方が高いという結果で、まず、だから「人の話をよく聞くようにしようね」ということかと思えます。

それと、もう一つその関係で、下ですけれども、私は、こういうモテない男性とか下流的な男性の方は、目上の人、年上の人と話すのが嫌で、それで例えば正社員にならないのではないかと考えていたんですけれども、これで見ますと、「年上の人と普通に話せるかどうか」は職業によって余り差はなくて、むしろ差があるのは、「人付き合いの人数は少なくとも深く分かり合える親友を求める」という人が、雇用状況が悪い人ほど高いんですね。ですから、実は同年齢の友達をつくる能力が弱いのもかもしれない。実は、上下関係のように、こういう言葉を使うべきだとか、使わない方がいいというマニュアルがはっきりした関係は余り苦手ではなくて、友達それぞれに合わせて自分のスタイルを変えていかなければいけない友達関係の方が、苦手であるということなのかなと、これはまだ仮説的に考えております。

それから、最後1枚、後からお送りしたんですが、これは、30代前半の男性が年収別に妻に求める年収ですが、非常にきれいでありまして、年収が高くなるほど女性に高い年収を求めず、低いほど、300万円ぐらいは求めるということにして、この傾向は40代の男性にはない傾向です。40代の男性は、年収はなくてもいいよという人が多いんですが、30代前半の団塊ジュニアは、年収の低い男性は、もう私はあきらめたから女性の方に是非稼いでほしい、こう思っているということです。しかし、女性の方は、もうずっと山田先生が言われてきたとおり、年収600万円以上の男性しか目に入らないといいますが相手にしないというところがございまして、これが、この雇用情勢のひどい時代には大変、結婚どころか恋愛をも不可能にする理由になっていると思います。

以上でございます。

佐藤委員

聞きたいことはたくさんあるかと思いますが、最後にまとめてというふうにしたいと思います。今の話を伺っていて、現代ではモテるのは大変だなという印象を受けました。

それでは、山田さん、お願いします。

山田氏

中央大学の山田昌弘でございます。よろしくお願ひいたします。

最初に、こういう場で話させていただいてありがとうございますというふうに言って始めようかと思ったんですけれども、私、だんだんもう若者代表じゃなくなってきていまして、かつ、年

寄りになって愚痴っぽくなってきましたので、一番最初に30秒だけ愚痴を言わせてもらいますと、私は、少子化に関する新書を4冊ばかり書いてまして、今日ここで発表するというので昔の資料を引っ張り出して見ましたら、1996年に出した『結婚の社会学』で、既に「男性の収入が低くなっているのが原因であり、男女交際が恋愛において二極化しているのが原因だ」と書いてあるんですね。かつ、記録を調べてみたら、1996年の人口問題審議会、金子さん覚えていらっしゃるかどうか分かりませんが、厚生省人口問題審議会で報告したときに発表していますし、自民党や公明党の少子化対策会でも、ほとんど同じことを発表してきまして、だんだん私、カッサンドラ、つまり、幾ら言っても聞いてもらえないトロイの預言者みたいな状況になってきて、そろそろ疲れてきているんですが、また性懲りもなく、多分、佐藤さんは100回くらい聞いていると思うんですけども、同じことを発表させていただきたいと思います。

佐藤委員

今日は第1回ですから、非常に大事だと思っております。

山田氏

ありがとうございます。

その愚痴から始めまして、まず、どうも「少子化対策」と言った場合に、今までずっとタブーがあったのではないかというのがあって、別に対策そのものが誤っていたわけではないと思うんです。対策自体はいいんですけども、対策の前提がどうも違っていたのではないかと感じています。まず、「お金」に関して余り語られないということが一つで、「特に低収入の男性が結婚相手として選ばれない」、最近では恋人相手としてもなかなか選ばれにくいというような事実が、少なくとも10年前まではマスメディアで削除されていましたので、最近はやっと公になってきましたが、それはもう10年前、20年前から続く未婚化の傾向の一つだったという事実をまず押えなくてはいけないだろうと思います。

私は社会学をやっていますので、社会学というのは、人が見たくないと思っているものを見せてしまう学問だと学生には説明しているんですけども、まさに見たくない、私だって見たくないんですが、現実にはそういうことがあるということを前提にすることが大切だと思っています。

そしてまた、セックス・恋人プロセスというものをほとんどの人が対策において無視してきたというのがありまして、特に、時々聞くのは、「未婚で子どもを産めばもっと」と言うんですけども、そもそも恋人がいない人が多いわけですね。私が去年スペインの学会で発表したときに、Women can not have a child without sex except St.Mariaというふうに言ったら大うけしたんですけども、聖母マリア様じゃない限り、なかなか1人では子どもは産めないということでございます。

そして、ここがポイントで、ウソと言うとちょっと言い過ぎなんですけれども、仕事をしたいから結婚したくないという人はほとんどいないということですね。子どもということは多少、勿論聞くんですけども、仕事を続けたいから結婚したくないという人はなかなか存在なくて、

かつ、最近、同志社大の橋木先生はよく「女女格差」という言葉を使います。専業主婦志向が、最近むしろ若い人の間で復活している傾向があるということです。

最後には、これは子育ての問題でもあるんですが、正社員主義というものがあらゆる子育て対策に貫徹しているらしく、参考資料の真ん中辺で、アジア女性研究に「『雲の上』の話にしないために」というものを書きまして、つまり、非正規の女性は育児休業を取れないし、更に、妻が非正規や専業主婦だった場合、男性が育児休業を取ったら、雇用保険から出るのは収入の30%ですから、「収入の30%で暮らせと言うのか」というような話を書いたり言ったりしているところがございます。つまり男女とも正社員でないと、なかなか今の子育て支援というのは使いにくいということがあります。しかし、男性も女性も正社員の割合がどんどん減っていているという現実があるわけです。だから、20年前に正しかった前提というのが今正しいというわけではない。

あとはもう簡単にいきますと、現在の未婚者増大の本当と私が判断する理由は、一つは、若年男性の収入が不安定化しています。見通し悪化と二極化が進んでいます。

第2番目は、男女の交際機会が増大し、自由化している。増大し自由化すると、モテる人とモテない人へ二極化し、もっといい人がいるかもしれないシンドロームと10数年前につけたんですけれども、そのときは何もヒットしなかったのですが、それが働いてしまうというのがあります。

更に、これはいわゆる、私の言うパラサイトシングル論ですけれども、成人しても親と同居している未婚者が東アジアでは非常に多く、親と同居していれば低収入でも待てる、「待てる」というのが最大のポイントなんです。つまりアメリカやヨーロッパ、ヨーロッパでも南を除きますけれども、では、よくワーキングプアの本などを読んでいくと、「独身では暮らせない」という記述によく出会うわけです。つまり、非正規労働者同士が出し合って生活しないと暮らせないわけですが、日本だと、親と同居して、非正規・低収入でも暮らせて、かつ待ててしまうというのが一つのポイントです。

4番目は、先ほどの性役割分業意識ですけれども、男性1人で経済的責任を負うことを当然と思う意識が強い、これは男女ともですけれども、特に若い女性には多くなっているということです。

次に、結婚の話に移りますと、逆に言えば、戦後から1980年ぐらいまでほとんどの人が結婚できていたのは、男性の収入が安定し、増大する。男女交際の機会が少ない。少ないと出会った相手がすてきに見えるという効果があるわけですね。ひとり暮らしが多く、同居していても親が農家等が多かったですので、家事ではなくて家業を手伝わされたために居心地が悪かったという、当然なんですけれども居心地が悪かったというのがありますし、収入が安定した男性が見つかったし、職場で女性差別があったなどの前提に支えられていました。だから女性差別を復活しろと私は言うわけでは全くありませんので、誤解のないようお願いいたします。

結婚のプロセスには、出会って、相手を好きになって、結婚を決意するという図のA、B、Cのプロセスが必要なんです。戦後から1980年ぐらいまでは、と があつたおかげで自動的に結婚できたわけで、職場と見合いで結婚するのにふさわしい相手が自動的に出現し、ほかに選択

肢が、身近に異性の数が少なく、つき合った経験が少ないので選択肢がない。私インタビューした中から、「これを逃すともう二度とチャンスはないと思ったから結婚した」という人に何人か出会ったことがあります。その人にインタビューしたときに、「だから、うちの娘には、理想的な人が現れるまで家でずっと待っていてもいいよと言っている」というところまで私はインタビューしたことがございます。

3番目は、つき合った2人が結婚するための障害がないというのは、まず規範で、つき合ったら、特にセックスしたら結婚しなければいけないという、つまり別れてはいけないという規範が、どうも1970年代までは非常に強くあったらしいということです。つまり、つき合って、かつセックスして、別れた場合、男性側に非常に強く非難が来るといような状況が1970年代までは、年配の方はそうだと思うでしょうし、若い人は「えっ？」とかというふうに思う人が多いと思いますが、実際にそうだったわけです。それで、結婚後の生活は、夫が仕事、妻は家事という分担がデフォルトとしてあったので、それに合わせていけばよかったです。どういうふうにお互いの生活を合わせるかというのは考えなくてもよかったです。

高度成長期は、結婚前の生活が豊かでなかったということもありますので、どんどん結婚したんですが、安定成長期に入りますと、結婚がどんどん先送りされて、親同居未婚者が発生してきます。当時でも18歳～34歳までの親同居未婚者率というのは、大体1970～80年ぐらいから7割ぐらいに上昇し始めて、女性はもともと8割ぐらいと高かったんですが、男性は1990年ごろまでは6割だったんですが、2005年ぐらいのデータですと、もう既に男女とも18歳～34歳までの親同居未婚率は大体8割になっています。2番目の状況として、男性の収入の伸びが鈍化してきたので、先送り傾向ということがございます。

その下の表は、大体的見取り図ですので略させていただきます。

そして、1990年代後半から、私が「新しい経済」と呼んでいるように、雇用の二極化が起きてきまして、不安定雇用の男性への拡大が起こり、かつ未婚女性も、男女雇用機会均等法があってキャリアになれるんだけど、逆に多くは非正規化している。近年かえって非正規化しているんですね。私もデータを見てびっくりしたんですけど、松田さんはよく御存じだと思いますが、1980年代半ばぐらいまでは、女性も未婚者はほとんどが正社員だったんですけど、今は未婚女性の正社員というのは半分強になってしまいました。

未婚化が更なる進展をして、パラサイトシングルはどんどん高齢化して、未婚男性は待っていてもなかなか収入は上がらないし、未婚女性は待っていても期待どおりに年収を稼ぐ未婚男性と出会わないし、男性が基本的に収入を支える意識が強いので結果的にそうなる。特に、収入が低く不安定雇用の女性ほど、これも当然なんですけれども、結婚した後に相手が不安定雇用だと、それこそ生活が成り立ちませんので、収入の高い人を求める。収入の高い女性の方は、今度は、先ほど三浦さんが言った趣味が合うとかそういう理由で、収入・学歴の高い方を求めるという、収入が高い人も低い人も、両方とも収入の高い男性を求めてしまうというようなことがあって、結局、次の表、これは経産省で発表したときに、橘木同志社大学教授が、「こういうデータはないのかね」とかと言って、「私、見たことがないから、じゃ自分で調査します」と言って調査し

たものなんですけれども、余りこういう調査をした人はいないのか、私のデータがいろいろなところで引用されるんですが、見たように、実際の未婚男性の年収と未婚女性の男性に求める収入のギャップというのは、非常に大きなものがあります。

更に、今度私、男女共同参画会議の民間議員に勝間さんと一緒に選ばれ、そこでも言おうと思っているんですが、若い女性で専業主婦志向が復活してきている。理想的な生き方として、結婚・出産後一度も働かないというものの割合が20代女性で突如上がって来てしまったというのが、私はびっくりしてしまいまして、30代、40代だとほぼ10%なのに、20代の女性で、結婚したら一度も働かないというのが23%かな、中の資料にちょっと書きましたけれども、それが非常にびっくりしたデータでございました。

三浦さんがいらっしゃるので、この話が出るかなと思ったんですけれども、いわゆるキャバクラに勤める人になりたいという人が、そのZ世代の20数%でしたか、20数%ですから、ほぼ4大卒よりも多いぐらいの人なんですね。勿論、大卒でやりたいという人もいるかもしれませんが。キャバクラで働く人というのは、永久の職業じゃないですから、そこで働いた後、専業主婦になるというのを多分前提とした選択だと思いますから、専業主婦志向が増えるのも、それは当然かなとは思いますが。

そして、あともう時間が数分になってしまいましたので4ページに行かせていただきますと、先ほど言ったように、1980年代ごろに恋愛意識、規範が大変化したと思っています。これは、70年以前と80年以降では以上のような変化があったし、実際、これも私が、これは東京と大阪のサンプリングデータですけれども、50代と30代を比べてみると、50代では恋人がいなくてもきちんと結婚できているんですね。80年代以降になると、未婚者でも多くの恋人とつき合った経験がある人がいるというような状況が出てきますので、出会うことイコール恋人になることではないし、恋人になることイコール結婚が増えるわけでもないという現実が出てきたということです。

80年代以降、交際機会が増大し、すると、これは三浦さんが今データを示したように、魅力格差が顕在化する。いろいろな異性と中学生ぐらいからつき合っていますから、目がだんだん肥えてきて、男性の場合、コミュニケーション能力というのは異性とつき合うことによって鍛えられますので、異性とつき合った経験がない人は、そのことによってまた気づかい度が低下して、また相手にされないという悪循環が起こってくる状況があります。

今日の資料の一番最後のデータで、日本性教育協会の調査から得たものなんですけれども、これは学生に限った調査ですので、サンプリング的には社会人とか中退者は入っていないのが残念なんですけど、大学生で見ただけでも、99年～2005年、この6年間だけで、むしろ、男子大学生の性体験率は横ばいなのに、3人以上の人が増えているということは、まさに若い男性の間での二極化が起こっているということがよくわかると思います。

最後に、「対策のために」というのを多少出したんですけれども、時間がありませんので。

佐藤委員

でも、そこをちょっと話していただいた方がいいと思いますので。

山田氏

申し訳ございません、ちょっと時間配分を誤りましたので。では、多少話させていただきますと、昔に戻ることは無理で、すべての男性が年功序列賃金、これは雇用者だけではなくて、一番最初に結婚難が問題になったのは、自営業の跡継ぎの男性の結婚というのは1970年代後半から問題になってきたわけで、すべての自営業が経済的に収入が増加する状況つくれるかといったら無理ですので、共働きで生活を支え、「新しい生活目標」を見出すようなことが必要であろうと。

意識的側面、つまり、それは若者の収入安定と男女共同参画がキーワードになるであろうと考えていまして、まず、「男性の収入のみに頼るという意識」を男性、女性両方とも変革していかななくてはいけないと思いますし、高収入女性と専業主夫の組み合わせが増えてもいいのではないかと考えています。私、専業主夫のインタビュー調査というのをしたんですけども、三浦さんが言ったとおり、専業主夫の夫ってカッコいいんですね。そうなんです、カッコいいんです。背が高くて、ロックバンドのボーカル崩れとかそういう人が、たまたまかもしれません。勿論サンプリングを取ったわけではないので、たまたま選んだ人がそうだったので。

あと、これは東京都でサンプリング調査をしたデータですけども、男女共同参画意識が高い男性と低い男性ではどちらが結婚しやすいかというのをデータに取りましたら、これは本が去年出るはずだったんですが出なかったの、口頭で言わせていただきますと、収入が高い方は変わらないんですよ。つまり「男は仕事、女は家事」に賛成であろうが反対であろうが、結婚率は全く変わらなかった。でも、収入の低い男性に限ると、「男は仕事、女は家事」に反対の男性ほど、恋人がいたり結婚している確率が高まると。よく考えたら当然の、稼げないんだったら気を使えという結果が出ている調査だと私は思いました。そういうものを受け入れる女性を増やすことだと思います。

勿論、だからといって、経済的に不安定な中で、今までいろいろ話をしましたけれども、やはり不安定な中で子どもを育てたくないというのが若い人の願いでございます。子どもを育てるといのは、長期的に安定した経済見通しがあって初めて子どもを育てられるわけですから、この不安定な雇用や不安定な自営業の跡継ぎが増える中で、そういう子育てしている若者たちの生活を安定させる方策というのが一番重要だとは思っています。制度的にはワーク・ライフ・バランス、特に正規女性だけに限らない対策をお願いしたいと思います。

5分ほどオーバーしまして申し訳ございませんでした。

佐藤委員

残った点は質疑応答の中でお答えいただくという形にさせていただいて、それでは、最後になりましたけれども、国立社会保障・人口問題研究所の金子さんに、いろいろなデータについて今回のテーマで整理していただいていますので、ポイントについて御説明いただければと思います。

金子氏

金子でございます。私の方から資料5について御説明を申し上げます。

こちらの資料は、本会議に当たりまして、未婚化・晩婚化の全体像がわかるような統計資料はないだろうかと御相談をいただきまして、なるべくこれに沿ったものということで取りまとめてまいったものでございます。不十分とは存じますけれども、本日の御議論の参考資料として御紹介させていただくというものでございます。

まず、資料の構成でございますけれども、最初のページに晩婚化、未婚化、非婚化につきまして、代表的な指標の動向を3つのグラフにてお示ししてございます。その次のページからは、それらの動向の背景になります未婚男女青年層の結婚にまつわる状況や意識につきまして、調査の結果を図表にてお示ししてございます。しばらくめくっていただきまして、ページの7以降は、参考事項といたしまして、晩婚化・未婚化ならびに非婚化と少子化との関係につきまして、あるいは結婚動向の帰結の一つの例などを示しております。8ページの方には、本資料の図表、各項目の位置づけの全体像というものを示した図、そして、9ページ、10ページには、補足的な、今日の話題になっております就業の状態と結婚意欲の関係などを示した図をお付けしております。

時間の制約がございますので、私の方からは、これらの統計図表の位置づけについてのみお話を申し上げて、個々の説明にかえさせていただきたいと思っております。

まず、7ページをご覧いただきたいと思っておりますが、本日のテーマの「『晩婚化・未婚化・非婚化』と少子化の関係」について、簡単にお示しをしております。

中ほどに少子化の3要因でございますけれども、第1として年齢構造の変化、第2として、本日のテーマになります結婚の変容というものがございまして、第3には夫婦の子どもの生み方、出生行動というものがございまして、我が国で生まれてくる子どもの数というものは、これらの掛け算の形で決まってくるようになります。

年齢構造、すなわち、これから親となっていく世代の人口規模というのは今後縮小してまいります。これについては、なかなかどうすることもできないという面がございます。一方で、結婚と夫婦出生につきましては、当事者たちの今後の選択や行動によって変わり得るものでございます。

次に、この結婚の変容というものがなぜ起きているのかということでございまして、次の8ページをごらんいただきたいと思っております。こちらは、青年層の結婚に起きていることを統計データで見ると、互いの位置づけを整理した見取り図でございます。

上から下の方へ説明してまいりたいと思っておりますが、図では、「結婚の効用」というものが、性あるいは生活機能の外部化、あるいは適齢期規範などの希薄化といったことで縮小しているということを示しております。これらにつきましては、赤枠で示されておりますように、本資料の図表4から図表7で統計資料としてお示ししてございます。それらの調査結果からは、未婚女性における性行動の活発化や結婚の社会経済的な利点の減少であるとか、それから適齢期規範の衰退といったものが捉えられております。

見取り図の方ですが、結婚の効用と結婚の負担感、コスト感とのバランスが崩れました結果と

して、結婚生活の魅力の低下ということが起きているのではないかと示しております。この結婚の負担感につきましては、図表8が参考になるかと思えます。

そのような形で結婚生活の魅力自体が下がっている中で、しかしながら、結婚生活そのもの以外にも、結婚にはもう一つ、異性のパートナーを得て生活や人生を共にするという重要な機能があるわけですが、これにつきましては、図表9から12におきまして、異性交際が非常に低調なまま推移をしているということ、したがって、なかなか結婚したい相手に恵まれないという状況が示されてございます。このあたりのことが、本日、先ほど三浦先生、山田先生からお話いただいたことにつながってくるかと思えます。

さて、それらを総合して、図表12によりますと、25歳以上の未婚者が結婚しない理由としまして、結婚に魅力を感じないので必要性を感じないという理由、あるいは適当な相手にめぐり合えないというような2つの理由が主なものとして浮かび上がってまいります。

これらの結果としまして、図表13、14に示しましたような、若者の間で、いずれは結婚するつもりでありながらも当面の結婚には消極的であり、先延ばしをする傾向というものがとらえられてございます。

また、図表15の方では、結婚意欲もあり、結婚したい相手もある場合でも、更に結婚資金や仕事との調整ということが障害になっているというような状況もとらえられてございます。

以上のような状況から、現在まで結婚の先送り、すなわち晩婚化というものが進んできたと考えられます。しかし、いずれは結婚するという本人たちの意思とは別に、全体として非婚化、要するに生涯結婚しないで過ごす人、あるいは子どもや家族を持たない人の割合が増える趨勢にございまして、少子化の深刻化が懸念されるところでございます。

最後に、晩婚化だけだと、やがて出生率は回復してくるものですがけれども、非婚化というものが広がりますと、自動的に回復するメカニズムはない形の出生低下というものにつながりますので、少なくとも望んでいる人たちに対しては、家族を持てるような社会的な支援等、そういう仕組みが必要ではないかと考えられます。

私のからは以上です。

佐藤委員

どうもありがとうございました。的確に未婚化・晩婚化の背景を整理していただいて、三浦さんと山田さんの報告に関して補完的な御報告いただき、どうもありがとうございました。

山田さんが言われたように、やはり結婚できていた条件は相当変わってきたので、以前であれば、80年代ぐらいまでは結婚できた人も、今の状況に置かれると結婚できない。僕もそうかもわかりませんが、先ほど、相手がいなくても結婚できていたという話ですね。つき合っている人がいなくても。お見合いだったり、紹介してくれる人がいたということだと思っております。そういう意味で構造的な要因、つまり、本人たちが未婚を選択しているわけではなくて、かなり社会構造が変わってきたことによる。本人たちも気づいていない面が相当あるのではないのでしょうか。だから、本人たちが気づいたり、社会的サポートがあると、かなり変えられる部分がある

だろうとも思えます。背の高さは変えられませんが、意識や行動など変えられる部分は相当あるかなというようなことを伺いました。

それでは、皆さんから、どなたへの質問かわかる形で御質問いただければと思います。では、どうぞ。

宮島委員

大変ためになるお話をどうもありがとうございます。漠然と考えていたようなことを分析するとかこういうことになるんだなと感じておりまして、まずは現実を見つめることが大事なんだろうと思います。

次に、これを政策にしていくときにどういう方法があるのかなと考えてみたんですけども。これはお三方に御質問なんですけど、1つは、収入の安定は、若者の雇用のところでもやりますように何らかの政策の打ち方はあると思うんですけど、三浦さんがお話いただいた、例えばモテる、モテないですとか、出会いの部分、恋愛に進むという部分に関して、行政はどういった手助けが可能なのか。例えば、ごく一部の自治体で、その出会いの機会をつくるようなことをやっているという耳にしたことがありますけれども、今、出会いの場そのものはあって、それが本質的な結婚に結びつく恋愛に進まないのだとすれば、そこに政策的な手を打つ方法があるのか効果があるのかということが一つです。もう一つの問題であるパラサイトというのは、まずは、パラサイトがある程度結婚の阻害要因になっているということを実感するということは必要だと思うんですけども、実際に親元にいる未婚者に、家を出るとか、するのはなかなか難しいかなと思っておりまして、例えば、どうなんでしょうね、自立のための奨学金というものでもないとは思いますが。欧米のように、大学生になったら自然に家を出るところにはなかなか行き着かないとすれば、政策面では何か可能なことがあるのかどうか、そのあたりのお考えをお三方にお願いします。

佐藤委員

今に関連して、もし政策に関連した質問があれば出していただければいいかと思うんですけど、出会えていないからという部分と、山田さんの方からあったように、相手がいても結婚に踏み切れないことを分ける必要がある。後者では、昔であれば背中を押してくれたわけですね、「彼女いいじゃない」、「彼いいじゃない」。この部分をどうするのかということがあると思いますので、これをちょっと両方伺えるとありがたいです。

もう一つは、経済的基盤はすごく大事だと思うんだけど、大企業の方に伺うと、大企業のホワイトカラーでも未婚率が高くなっているようです。経済的な基盤だけでも解決が難しい点を視野に入れながら、政策的な取組みについてお三方からお話を伺えるとありがたいと思います。

どなたからでも。では、三浦さんから。

三浦氏

難しいんですけども、質問にすぐお答えできないんですけど、私は、まず、今の若い男性は、

さっきの女性に求める年収を見ても、男女平等意識が強いんですよ。なのに正社員になれていない人が多い。だから、そういう意味では、今度出す本では、本としてのギミックとして男性保護法をつくった方がいいのではないかと。つまり、今若い、35歳以下、ロスジェネ世代にとっては、女性が弱者ではなくて男性が弱者であるという認識に立たないと政策が打てないのではないかと。これは本を売るためのギミックなので、「おまえ本当に考えているか？」と言われるとあれなんですけれども。

一方で、女性の地位は、では向上しなくていいのかということ、そんなことはなくて、例えば、低収入の男性を養えると言っただけとはいけないのかもしれませんが、それができる女性というのは、やはり調べてみるとまだ本当に、例えば年収600万円の女性は6%ぐらいですかね。女性の進出が進んだとは言っても、さっき山田先生がおっしゃったように、正社員で総合職でばりばり稼いでいる人というのはごくわずかなので、じゃ、あなた男性は養いなさいと言っても、それは6%の女性しかできないわけです。だから、男女ともにやはり地位を向上させないと無理だろうと。だから、女性には600万円の人でも500万円の人でも増やしていただいて、200~300万円の男性と一緒に暮らすというのが当たり前にならないと、ちょっと結婚は増えないなと。

たとえ年収が200~300万円でも、やはり男性は正社員でないと結婚にはなかなか踏み切れないと思うんですね。正社員じゃないと結婚してって言えないですよ。だから、正社員化については、ちょっとやはり男性をアフーマティブアクションで優先しないと解決しないだろうと思います。

あと、行政とかが出会いの場を設けるかですが、設けないよりはいいと思うんですけれども、何しろ家でゲームをやっている人が多いので、出てくるのかどうかという問題がありますね。

あとは、ワーク・ライフ・バランスの論理と絡むと思うんですけれども、極論を言えば、残業を一切禁止するとか、何というか、思い切ったことをしないと、出会いのチャンスもないし、せっかく結婚しても、すれ違いだしまいたいなことで、やはり日本人のこの仕事中心の生活自体を見直さないといけないと言いたいところなんですけど、何しろこの経済情勢なので、みんなもう目がつり上がっていますので、どうなんでしょうか。済みません、これぐらいしか思いつきません。

佐藤委員

では、続きまして、山田さんをお願いします。少しメモのところにも結婚活動の話とかサポート事業のこともありますので。

山田氏

まず、経済に関してですけれども、三浦さんは、男性だけ正社員にするという、それはちょっと私としては肯定できないんですが。雇用で保障するか、社会全体でいわゆる下支えして保障するかというのは、これは難しいところに来ているのかなという気がしています。つまり、男性も女性も全員正社員、雇用の保証はできると思いますけれども、フルタイムの正社員化をすると、多分、私以上の年齢の人はみんな引退していただかないと、1回オランダでやったように、中高年者の引退と引きかえに、若い人に職を譲るというオランダモデルというものができればいいん

ですけれども、なかなかそれは難しいかもしれないので、社会全体で、いわゆる子育て期の若者の所得保障をしていくという方が、私としては好むものであります。今度そういう本を4月ごろに出しますので、よろしく願います。『ワーキングプア時代の社会保障』という本を出しますので、よろしく願います。

三浦氏

子育て期は、男女とも残業禁止とか、そういう方策は。

山田氏

残業禁止をして、承知しても、収入を保障をしないといけないので。私、ワーク・ライフ・バランス調査を今年1回かけましたら、妻の方は、夫にもっと働いてほしいという、今年の3月ぐらいは、もっと働いてほしいという方が上回ってしまったんですね、時短をして早く帰って来てほしいよりも。今の時代。それを調査したのは去年の2月ですから、多分今年には実はもっと増えているかもしれないとっていて、ちょっとそこが難しいところかもしれないというのは、ちょっと言い添えておきます。

あとは、出会いやコミュニケーション能力に関しては、5ページの下の方に多少述べておきました。やはり出会い自体の格差がありますので、出会い事業が全く無駄かどうかと言うと、私はそうは思わなくて、これもただ単に出てこいというよりも、これは引きこもりを外に出すときも似たようなことなんですけど、NPOを活用したりして周りが積極的に出て行くようにしましょうといったようなものを出すことはできると思います。それをサポートする事業もあると思いますし、更に、結婚を目的としないで、昔はサークル活動でよく結婚したというのはあるんですけども、そういうことも、そういう趣味活動等で男女ができる経済的・時間的余裕を出す必要があると思います。

2番目は、「自分を磨き、相手に妥協する」ということですが、結局、男性においては、経済力とコミュニケーション力をつけるということしかなくて、男性が難しいのは、男性同士って余りコミュニケーションしないので、男性がコミュニケーション能力、コミュニケーション能力というのは、気遣いという、別に自己主張する能力とは思わずに、相手の欲求を、相手が何を望んでいるかを的確に察知する能力で、それは多分仕事にも役立つようになってきているので、そういう人は収入が高いんだと私は思うという逆の相関もあると思うんですが、そういうものを訓練する。

私は、ある結婚相談所のデートの練習というのをちょっと見たことがあるんですけども、それは極端にしましても、デートの練習とは言わないまでも、学校教育等で、相手の話を最後まで黙って聞く練習というか、そういうものを取り入れる必要があるのかなと。

佐藤委員

つき合い方は男女だけではないですね。そいいう意味ですね。

山田氏

そういうことでございます。必要があるだろうと。

女性の場合は、これも結婚相談所の人から断言していただきましたけれども、結婚相談所に来て、結婚できる女性のタイプは何ですかと聞きましたら、これはもう明白だそうで、条件の数が少なければ結婚できる、条件の数が多ければできないという、ほぼ明確な関係があるそうなので、どうしても自分が譲れない条件だけに絞るといのように誘導していくことが必要だと私は考えているんですが、なかなかうまくいかないのが難しいところで、特に三浦さんのデータにあったように、自分がモテると思っている人ほど条件が高くなってしまおうというのがあって、なかなか難しい関係があります。

最後には、結婚後のライフデザインをサポートする、私と佐藤先生とライフデザインカウンセラー協会というのをNPOで立ち上げているわけですが、つき合っている2人が結婚しやすいように、お互いをすり合わせる、ライフデザインをすり合わせるようなことをサポートすることも必要かと思っております。

済みません、長くなりまして申し訳ありません。

佐藤委員

三浦さんが言われた、いわゆる長時間労働の解消も僕はすごく大事だと思うのですが、今つき合っていない人は、時間があっても出て行かないのではないのでしょうか。時間は1つは条件としてはすごく大事なけれども、今みたいに不況で残業が減っていますけれども、では、結婚する人が増えるかという、外へ出て行かないと難しいかなと思っています。

金子さん、いかがでしょうか。

金子氏

恋愛であるとか結婚であるとかという領域の政策というのは、極めて難しい問題をはらんでいっていると思っております。直接的な施策として考えられるのは、先ほども出てきましたワーク・ライフ・バランスというような考え方のもとに、若い人たちの個人的な生活時間というものを支援していくということが一つあるかと思えます。

ただ、それは、あくまでも仕組みの方の問題でありまして、その中で、仮にそういう条件を整えたとしても、三浦先生、山田先生のお話にありましたように、個人がその中に実際に出て行って、結婚に結びつくようなパートナーを見つけることになるかどうか、その辺は個人の能力というような、モテ度とか、いろいろな言葉が出てきましたけれども、そういったことに依存すると、これは、やはりかなり深い問題ではないかと思えます。

私自身も、表面的な統計ばかり扱っているように思われるんですが、実は、非常にモテ度とかそういった領域の問題意識に共感をしておりまして、やはり少子化の問題として、そういった深いところにある領域に目を向けていかななくてはいけないのではないかと思えます。

政策的に、では、それはどうするのかということですが、そこまで行きますと、今お話に出てきたライフデザインとか、コミュニケーション能力ですとか、あるいはデートの訓練というようなお話でしたが、必ずしも男女関係とは限らず、やはり日本人の若い人たちが、自分自身のライフコースを自ら選択していく、そういう時代になっていると思うんですが、そういう能力を開発するような、教育と言うとちょっと強いかもしれないんですけども、一緒に考えていくというような体制ですか、そういったものがあるといいなと思います。

以上です。

佐藤委員

勝間さん、どうぞ。

勝間委員

ちょっと、今までの議論を2つに整理させていただきたいんです。1つが、すごく嫌な仮説を今ずっと頭に思い浮かべていました。何が嫌な仮説かということ、今の日本の産業構造において、付加価値の全体額はほぼ決まっているわけです、今の国際競争力上。その産業構造上の付加価値を分配するところにまず今ゆがみがあるわけですね。そうしますと、このゆがみを変えない限り、実は、結婚もできない子どもも増えないのではないかとこの抜本的な問題に今までの少子化対策というのは恐らく着手できていなかったのではないかとこの結論になるのは、これはこの理解で正しいのでしょうかというのが私の1つ目の質問で、もしそれが正しいとしたら、その所得の再配分機能をどのように持たせれば一番、非婚問題あるいは晩婚化問題というもののゆがみが取れるのか。それが単純に、いわゆる正規・非正規均等待遇であるとか、最低賃金の引き上げとかをやれば済む問題なのか。それをすればするほど、今度また違うところにゆがみが出て、結局配分ができなくなるのかというところを1つ目の話としてお伺いしたいです。

2つ目として、ちょっと今マトリックスを考えたいんですけども、どうもこういうことなのかなと。2掛ける3のマトリックスなんです、高所得、中所得、低所得で男女に分けます。そうすると6つボックスができるんですよ。そうすると、それごとに多分やらなければいけない非婚対策が違って、例えば高所得者の男性においては、お金の問題でなく、恐らくライフ・ワーク・バランスの問題で、もっと時間が必要であるという話であったり、低所得者の女性であれば、高望みをしないという話であったり、低所得者の男性にとっては、さっき山田先生のお話にあったような、女性に対してのえり好みをせずに、それぞれ男女共同参画を認めるとかという話なのかなと思っていて、そういうようなきめの細かな対策というのは、これまで何か議論されてきたのかというのが2つ目の質問です。もしなかったら、それをつくればいいのかというのが提案になります。

佐藤委員

では、もうどなたからでも、2つのうち1つでもいいですし、どなたからでもお答えいただく

というやり方で行こうかと思しますので、どうぞ。

三浦氏

理想論でいいですか。

勝間委員

理想論でいいです。

三浦氏

どうやって実現するかは考えずに理想論を言えば、それは勿論、若い人の正社員化とかという話になってしまうんですが、ただ、モテる、モテないという話になってしまうとなかなか。そのモテの格差の分配というのが。

勝間委員

やはりお伺いしたいのは、モテというのは、やはりお金もモテの一部ですよ。

三浦氏

勿論、だから少なくとも経済格差を縮めることはモテ格差を縮める効果を持つと思うので、行政でできることは、やはりそういう部分かなと思いますけれどもね。

佐藤委員

では、ほかの方。

山田氏

まさに勝間さんのおっしゃったとおりで、今の経済構造のゆがみ、特に社会保障配分における過去高所得、過去正社員であった男性とその奥さんに対する強力な分配というものが残っているのが大きなゆがみとしてありますから、せめてその分を若い人の安定に回す。そういう人たちの息子や娘、高齢者で高額の年金をもらっている人たちの息子や娘が非正規で困っているというような状態がありますから、それを個々の援助で解決しようとするから結婚ができなくなるわけで、それを全体システムとして再配分をしっかりと、しっかりとという言葉は余り使いたくないんですが、再配分をすることが一つの根本的な対策だと思っております。それが、私が『希望格差社会』の中や『少子社会日本』の中で言いたかったお話でございます。

2番目の点は、勿論、まさに勝間さんのおっしゃったとおりなんですが、それに地域性も加えていただきたいというのが大きい話でございます。先ほど3ページのところで「青森」と書いたんですけども、実はこのデータは青森の県庁所在地でないある市なんですね、県庁所在地は、まだ男性の正社員が多いんですけども、県庁所在地でない市に、ある市と言っておきますが、

ある市においては、本当に年収200万円以上を稼ぐ未婚男性は半分しかいないわけです。そこでは、実は女性はそんなに高望みはしていないんですね。私も、ここはまた別の北陸地方のあるところで調査したとき、専業主婦になりたいんだけど、そんな夢のような話はあるわけない。つまり、周りの男性を見ていると、専業主婦を養えて家を買えるような男性はいないというのを自覚しています。だから、「せめて相手が年収200万円だったら、親と同居して結婚できるのにな」みたいな話をしています。

それと、都会ではなかなかそうもいきませんので、都会では2人で1.5人分ぐらいずつ働いて、合わせて年収600～700万円ぐらいないとやはり生活できないなという人が多いので、男女、高、中、低プラス地域性というものも加えていただければと思っております。

佐藤委員

金子さんよろしいですか。

では、ほかに。どうぞ。

松田委員

非常に冷静に現実を分析されていると思いました。私も近い分析をしますけれども、非常に合っていると思っています。

その上で、今のどうしたらいいかというこの格差の問題ですとか配分の問題、社会保障の問題はまさにそのとおりだと思います。ただ、今この日本の少子化を考えたときに、長期にやっていくことが非常に大切ですが、それはそれとして、非常に短期にある程度の成果が出ないと、この少子化傾向は恐らく変わらないという指摘もあります。特に団塊ジュニアがもう恐らく出産・結婚年齢をピークアウトしますので。

そう考えたとき、短期的には何か先生方のお立場から政策でできることはあるのでしょうかというのをお聞きしたいです。何でも結構です、お願いします。

佐藤委員

確かに、先ほど全体のセーフティネットの仕組みというのはかなり時間が、これはやらなければいけないのですが、もちろんそれを続けていく。しかし、ここ5年ぐらいがすごく大事ですので、5年ぐらいに何をまずやるべきということに関してお考えを伺えるとありがたいです。

山田氏

その答えの一つが結婚活動で、結婚活動は、隠れた需要を掘り起こすと。つまり経済構造をすぐ変えるのは、変えて若い人たちの格差を変えるのはすぐには難しからうから、せめて眠っている需要を掘り起こすために結婚活動を推進していけば、多少なりとも回復するのではないかと思って本を書いたというところもありますし、やはり結婚したいと思っている人は多いというのは救いだと思うんですね。ですから、経済の全体構造を変えるのは、雇用構造を変えるのは無理に

しても、結婚して、子どもを育てたら、せめてフランス並みに出産・育児はただでできるぐらいにしておかないと、なかなか難しいなと思っております。

佐藤委員

どうぞ。

勝間委員

婚活産業って少しは発展しているんですか、それとも横ばいなんでしょうか。やはり産業としてのインセンティブがないと、そこでも経済活動が起きませんよね。

山田氏

私も多少調査等もしていますけれども、未婚者がこれだけ増えていますので潜在需要は多いんですけれども、潜在需要を掘り起こすとミスマッチが出てくるというちょっと矛盾が出てきてまいりますので。つまり、逆に言えば、お金を払ってまで活動できるという、利用できる層というのは、逆にそれほどいないという、それほどというか、増えてはいるんですけれども、産業的には大きく伸びているわけではないと思います。

佐藤委員

そのことでちょっと伺いたいのは、婚活なりはすごく大事だし、社会的にも結婚サポート事業みたいなものもすごく大事だと思います。婚活というキャッチフレーズで、若い人たちもそういうことが大事だと少しは思うようになったわけですがけれども、ビジネスとして伸びないということは、利用しようとする未婚者が少ないわけですね。

ここがなぜなのか。例えば、山田さんにはよく今までも僕はよく話していたのですが、例えば仕事を变えようとか、失業するとハローワークに行ったり、若い人はジョブカフェに行ったりして相談するわけですね。私はこういう経験あります、これやれます。それで700万円欲しいですとかと言うと、あなたの仕事だと700万円でなく500万円だね。それであれば教育訓練を受けた方がいいですよ。面接の前にプレゼンの仕方を教えてくれたりするんですね。そういうことをやって、最後に選ぶのは本人ですね。だけれども、そういうサービスを使って勤務先を探したことは、別に恥ずかしいわけでも何でもなくて、できるだけいろいろな情報を集めて、自分を磨いて就職する、これはいいことだと思っているわけですね。

ところが、結婚になるとそうじゃないのですね。どちらも自分が最後は決めるのですが。ところが、結婚だけは、社会構造が変わって、そういうことをしないとなかなかめぐり合えないのだけれども、なかなかそういうものを社会的に用意しても利用する人が増えないのです。これどうしたらそう変わるのだろうかという、その辺はいかがですか。

山田氏

一つは、難しいのは、ちょっとロマンチックラブイデオロギーの日本における入り方というのが、すごく変な入り方をしてきたかなという文化的な要素は一つあると思います。逆に言えば、欧米では、すごく好きでなくても、同棲から入ってだんだん好きになるとか、取りあえずつき合ってみるとか、そういう習慣が結構あるんですけども、日本だと、これだっていう人と出会って、お互いに好きにならないと恋愛じゃないというような意識がまだまだ強く、とって、それは人の価値観、意識ですので、それを変えるというのはなかなか難しいので、せめて婚活ということで、そういう人を見つける活動をするというのは一般的なことなんだなというようなことを広めることぐらいはできるのではないかと考えております。

佐藤委員

そうすると、待っていたのでは結婚できないしということをもまず理解していないのですね。それを理解してもらって、婚活が大事だと理解してもらおうということが出発点になるわけですね。

山田氏

私の一つの出発点、それですべてが解決するわけではないです。

佐藤委員

勿論、勿論。でも、少なくとも、それは少し動かすバネになるだろうと。

三浦氏

先生の本を読んで、実際に婚活を始めた人と始めない人の違いは何ですか。

山田氏

それはまだ調査をしていないんですが、何人かの人からは、そういうことをしてもいいんだと思うようになったという肯定的な意見はいただきました。

勝間委員

ごめんなさい、もう一つ、しつこいんですけども、例えばヤフーマリッジとかミクシィとかあるわけですよ、別に普通にネットであることはあって、しかもみんなインターネット環境があるのに、逆に何でインターネットで人のつながりで出会える場が増えても、やはり結婚しないか。さっきのロマンチックイデオロギーと格差のミスマッチの問題なんでしょうか。

山田氏

一つはミスマッチの問題と、私もアメリカに1年留学していて、家族研究者でしたので、そういう恋愛状況を、調査とまではいきませんが、知り合い、友達等に英語の勉強も兼ねてインタビューしたんですけども、どうもアメリカは、とりあえず仕事に就いてみると同じく、とりあえ

ずつき合ってみるといったようなことが気軽に行われているらしい。日本だと、そういう活動をするのは恥ずかしいというような意識が強いんですが、逆にアメリカではカップル文化ですので、相手がいないと恥ずかしいという方がどうも強いらしく、いわゆるおひとりさま文化とカップル文化の違いというのも多少あるのかなと思います。

それが、昔は、つき合わなくても結婚できるという形で、つき合ってから、結婚してから、多分男性は鍛えられたんだと思うんです、コミュニケーション能力にしても何にしても。しかし、今は、女性は特に完成品を求めてしまいますので、完成品というか、コミュニケーション能力の高い人と低い人が周りにいれば、高い人と一緒になりたいと思うのは、それはしょうがないと思いますので、そういういろいろな文化的な偶然性と経済的な状況と、今の恋愛・結婚状況というものがミックスして、日本は非常に不利な状況に置かれたのかなと思っています。

それと一番似ているのが台湾の状況で、台湾は極めて日本に近い恋愛文化から親同居文化、経済格差、似たような状況にあるような感じでした。

佐藤委員

ほかには。どうぞ。

安藤委員

特に質問というわけではないのですが、見たくないものを見てしまったなという、レントゲンで胃がんはわかっていたんだけど、開けてみたら「やはり」という感じで、もう何の手の施しようもなく閉じてしまいたいみたいな心境に今あるんですが、そうは言っても何かやっていくのがこのPTなので。

ご報告いただいたような状況、すでに醸成されてしまった恋愛や結婚に対するこの気分やムードというか、女性が完成品を求めてしまうと、男がもうあきらめてしまっているというのを、すぐに政策によって変えていくのは、ちょっと至難のわざだろうなと思っています。そういう意味で、物事をうまく進めるためにハードとソフトが多分必要で、政策でできるところというと、やはり雇用の問題だとか、経済的な部分の、そういうところのハードの充実。でも、それだけだと社会のムードや気分は変えられないと思うので、やはり価値観の変化を促していくようなある種のソフト政策、つまり教育や分かりやすい啓蒙が必要かなと思っています。

当NPOでは、高校生相手に今、父親授業というものを展開していて、今度は中学生相手にレディファースト講座というのをやろうかなと思っています。つまりモテ男の早期教育ですよね。これからは三低男（低リスク・低依存・低姿勢）がモテるのであれば、三低男を増やしていくのがポジティブな施策だと思います。低リスクというのは経済的な部分が大いなので、これはやはり政策の部分で、あるいは企業の努力によって雇用を生み出していくことが必要でしょう。でもあとの2つ、低依存と低姿勢というのは、男女共同、育児参画などの意識化、仕事一辺倒でないワーク・ライフ・バランスの生き方などを若いころから理解し、社会に出て、家庭を築いて実践できるようになってないといけない。その辺を家庭や社会で教えられないのなら、教育に組みこ

んでいき、当たり前のように学校で習わせるべきです。中学、高校、大学にて、つまり10年後、15年後に結婚・出産を迎えて育児をするような人たち（次世代のパパやママ）に対して、長期的視野で育成するつもりでやっていくということが、僕は必要なのではないのかなと思っています。

佐藤委員

どうぞ。

勝間委員

もう一つ、今回の結婚の話で、やはりタブーとして2つお伺いしたいのが、婚外子の問題と妊娠中絶の問題です。この2つについて、もしお二方が何かデータなり知見なりをお持ちでしたら、今どういう状況にあるかということをお教えいただけますでしょうか。是非。

佐藤委員

では、金子さんの方から、感じだけでも。

金子氏

婚外子についてですが、欧米も、フランスやアメリカを除いて日本と同じような少子化の状況にございます。ただ、大きく違うのが同棲の割合。これは日本でも徐々に増えてきているように見受けられますけれども、それとともに婚外子が極めて少ない、2%ちょっとを上回るぐらいで、これが日本の特徴ですね。東アジアの特徴と言ってもいいのかもしれないんですけども。

ただ、そこで見ると、実は、既に今日本で生まれてくる第一子の4分の1以上が、4人に1人以上が婚前に妊娠をされている。ですから、その辺のところは、形としては違うのですが、似たようなことが生じてきているのかなと思います。ただし、そこで、同棲の中での婚外子ということにならない日本の特殊性、ここは勿論、確かに一つのポイントだと思います。

勝間委員

婚外子で、だから結婚する人はいいんですけども、恐らくかなりの割合で妊娠中絶が行われているという考えをしまして、そのデータがあるのかどうか。

あと、当然、いわゆるおめでた婚、できちゃった婚については、海外もあると思うんですよ。日本がそれが25%ぐらいだから、十分それは婚外子と代替になっているのかというのは統計的に正しいのでしょうか。

三浦氏

結婚前に妊娠して、それで結婚する人と、中絶する人と、未婚のまま産んでしまう人の割合ですよね。

勝間委員

そうなんです。その各国比較がないと、まさしくそれが、日本は婚外子が生まれないのは、できちゃった婚しているからだという話だと、その議論の中に漏れが生じていると思うんですね。

金子氏

それ自体を実際に比較した統計というのはございませんけれども、確かに20代前半ぐらい、あるいは10代の後半ぐらいの妊娠中絶、全体の中絶が減ってきている中で、やはり若い層で増えてきているというのは、ある程度そういった傾向、婚前妊娠が高まっているのと同じような状況があるのではないかということは想像できます。

勝間委員

婚前妊娠自身は、統計上、やはり年々増えているんですね。そういう統計もほとんど見たことがないので、一体どのぐらいあるかと。

佐藤委員

それは一応出していますよね。推計で。

金子氏

出ております。大体90年代の後半、97年以降急激に増えまして。ただ、この数年のところは横ばいのような状態なんですけれども。

勝間委員

婚前妊娠の件数が、中絶と婚外子といわゆるできちゃった婚子に分かれるということですね。

金子氏

今申し上げているのは、出生の中で、妊娠期間よりも結婚期間が短いという形で取ったものです。

勝間委員

その統計はよく見えています。ただ、しつこいんですけども、結局私が知りたいのは、みんな結婚しない非婚化になったときに、少子化の問題をせっかく議論しているんだから、非婚の中で子どもがどうなっているんだという関係資料がぼっこり抜けているという印象を持っているということです。

佐藤委員

もしわかれれば後で。ただ、中絶で若い人が増えているより、実際、日本の場合は年齢で結構上

の方が多いんです。そうですね。

金子氏

従来からそれはそうです。でも、それは恐らく有配偶の中での、いわゆるストッピングと言われる中絶だと思われませんが。

佐藤委員

では、今の点で、三浦さん、山田さん、何かあれば。今の勝間さんの御質問で、それについて御意見がと言われたので。

山田氏

私もそれを知ろうと試みたことはあるんですが、やはり中絶した人をピックアップするという調査がちょっとできにくいのでなかなか難しいんですが、いわゆる差別があるからという形で中絶した人は、まだまだ日本は多いと思います。

ただ、私の後輩が、いわゆる非嫡出子の子どもの側の調査を、インタビュー調査をしている人がいて、その人によると、差別を受けたというよりも、経済的に大変だったのだという方が、そのつらさでは大きかったと述べていたと思います。つまり、差別があるからなのか、それとも夫がいなくて経済的にやっていけないから産めないのかと言ったら、両方あるとは思うんですけども、私は後者の理由が強いのかなと思っております。

つまり、結局は、欧米や日本では一夫多妻になるわけにはいきませんので、いわゆる結婚できない相手との妊娠・出産というのはいわゆる日本ではそれが多分相当少なく、非嫡出子のかかなりの部分はそちらだと思いますけれども、それも、結局は、要は経済的なものの後押しがあれば増えるのではないかなと思っております。

佐藤委員

宮島さん、どうぞ。

宮島委員

今の問題意識を私も感じています。女性がやはり理想が高くなってしまっているという現実はあると思うんですが、理由のその一つとして、やはり離婚のリスクを考えたときに、今の日本の状態では、子どもを持った状態で離婚して、母子家庭になったときの経済状態が相当厳しいという現実があると思うんですね。なので、よほど確信があって、かつ収入的にも愛情的にも、ずっと続くと思えないとなかなか踏み切れないというところがあるのかなと思ってます。そのあたり、母子家庭などに関しては政策でフォローする方法があると思ってます。

あと、これは御質問ですが、性別による役割の意識というのが、今どの程度負担になっていると思われるのか。例えば、女性の側から見たら、もう今や共働きでなければなかなか生活が成り

立たないとすれば、それは共働きでいいとして、でも男性のほうが「一緒に稼ごうね。でも家事はあなたよ」というのはやはり嫌だと思ふのが女性側の立場だと思ふんですね。その部分で、「どうせ家事を全部やるんだったら収入の高い人ね」という判断は当然だと思います。あとは、本人同士が納得していても、上の世代が必ずしもそうは思わない。山田先生の御本でも拝見したんですけれども、上の世代は、ばりばり働くような女性は、うちの息子には嫌ですというようにおっしゃる方もいらっしゃると思ひまして、そのあたりの性別による分担の負担感というのが、今どの程度影響しているかということをお伺いしたいと思います。

佐藤委員

三浦さんから。

三浦氏

キャバクラ嬢の本を出すと「キャバクラって何なんですか」とか「どうなっているんですか」と聞かれるんですが、私はキャバクラの研究をしたわけじゃなくて、キャバクラ嬢になりたい女の子の研究をただけなので、結婚についても山田先生のように専門家じゃないのでわからないんですけれども、先ほど先生がおっしゃったように、経済力があれば、家事に協力してもしなくても結婚できるというのは確かです、私のデータでもあったと思ふんですが、今、そもそも若い人にとって、特に料理とかは、ちょっと趣味化していますから、趣味としての料理だったら、やはり上流の男性の方がはるかにするんですよ。

だから、どうなんでしょうね、要するに下流な男性ほどカップラーメンで済ませているみたいなのところがあって、雨宮処凜さんと座談会したときにびっくりしたんですけれども、「お金がないなら、ジャガイモでもキャベツでも買ってきてゆでて食べたらどうだ」と言ったら、いや、彼らは、つまり雨宮さんの周りにいる人たちは、「彼らはお湯を沸かしたことがない。火をつけたこともない」と。確かに、コンビニにはお湯がありますから沸かす必要がないので、それまではお母さんがやっていたとすると生活能力の差があるわけですよ。

昔は、東大を出て学者になるような方で、もう何も生活のことはできなくても結婚できたと思ふんですけれども。例えば、東大生でも何でもいいんですが、そういうブランド校の学生も、学歴だけじゃ結婚できないと気づいてしまっていると思ふんですよ、男性が。それこそ気を使うとか、ちょっと料理を、おしゃれなパスタもつくれるぜみたいなことが売りになるなと気づき始めていて、そうすると学歴の、偏差値の高い大学の人は、勉強だけでは結婚できないから料理もするぞと気づいて、よりモテる男に変化して行って、それで、他方の極にはお湯も沸かせないみたいな、そういう人がいて。お湯が沸かせないとラーメン屋に勤めるわけにもいかないですもんね。だから、その生活能力の差も出ているんだと思ふんですよ。

全然答えになっていませんね、済みません。だから、女性の方が収入が多くても構わないという男性はどうも増えているし、家事をしてもいいよと答える男性は所得の低い男性に多いんですが、本当にできるのかというと怪しいかもしれない。

佐藤委員

山田さん何かありますか。

山田氏

そういうネタ的な話でよければ、ちまたによく言われるのは、高偏差値の私立中高は、きちんとトイレ掃除とかそういうのをやらせることができるんですよ。逆に、余りそういうところではない私立高校は、トイレ掃除をやらせると生徒が集まらないので、全部業者がやってしまうといったような、まさにそういう、なんて言ったらいいんでしょうね。

三浦氏

掃除力を鍛えているんですね。

山田氏

掃除力を鍛えるためには高偏差値校に入れなければいけない、そういう矛盾が今、矛盾ではないですかね。矛盾と言っではいけないですね。そういう状況が起きているというのも、一つ気づいたところですよ。

ただ、男性に関しては、私は、男性に関しては世代差が大きいと思っていて、2005年に35以上だから、1970年以前生まれと70年以降では、全体的に見て男性の意識は大きく変わったと思います。本当に家事をやってほしいし手伝ってほしいという男性が、女性から見ると全然不十分だと思うんですけども、少なくとも意欲の面では、そういう男性は増えていると思います。その点に関しては、期待はできるのではないかと考えております。鍛えればよいということじゃないですか。

小淵大臣

全然結論が出ていないので。

佐藤委員

取りあえず何かあれば、質問でも何でも。

小淵大臣

お三方、本当にありがとうございました。さっき安藤さんがおっしゃっていたように、見たくないがんを知ってしまったというような気持ちであります。山田先生には、随分前、97年からその問題意識を自民党でも公明党でもお話しただいてきたのに、政治の方では全くそれに対する検討が進んでこなかったというのが、正直な感想であります。

やはり若い人たちの声というのが、この国の中ではがくと小さいんですよ。その部分をど

うにかしなればいけないと思っています。政治の世界でも、山田先生が話されたときの状況、皆さんがどんな反応をされたのか、どんなメンバーが集まっていたのか、私にとっても興味深いところですが、やはり世代間のギャップというのは大変大きいんですね。私がふだんおつき合いしている国会議員の方々は自動的に結婚できた方々なので、こういう話になると、結婚できない若い世代が、さも意気地がないとか、力がないとか、そういうことをおっしゃる方が多いんですけれども、ちょっと時代が違うということと、今の若い人たちが置かれている現状をもう1回冷静に見るべきだということを思います。

ただ、それを言えない私たちの世代の力不足と人数の不足というのもあるんですけれども、政治の世界を見てみると、例えば今一番活躍している60代の政治家の先生というのは、20～30年前に国会に登場した方です。そのときには、青年団というような組織が地域の中にすごく力強くあって、同世代の人たちが応援して議員に当選するわけですよ。その世代が全部同じように年をとっていくと、どうしてもその世代の声とか力とかというものがとても大きくなるので、そのせいでうまく所得の再配分できていないということがあると思うんです。

今、私たちのような若い世代が国会に出るとなると、勿論、同世代、若い世代に応援してもらうんですけれども、やはり、声の大きい人たちのおつき合いというのがあります。特に私は二世議員だから強く感じるのかもしれないんですけれども、若い世代の声や存在感といった政治に対してのPR力みたいなものが物すごく欠けているんですね。私なんか政治の中では若いと言われている世代ですけれども、それでも、私よりちょっと下の世代となると、どういう感覚を皆さんがお持ちなのか、正直に言って本当にわからないんです。だから、今日、大変ありがたいと思ったのは、今の現実というものを見たくなくても再認識したということです。この状況を踏まえて、さて何をするか、短期的な政策ではどうかというと、本当にみんなで頭を抱えてしまうんですが、まずこの状況を共有することがひとつ、大事なことだと思いました。

それから、結婚は、なぜこんなに魅力がないものになってしまったのでしょうか。一方で、結婚したいと思う人はやはり、多くいるんですね。そのあたりのギャップというのは一体どういうことだろうかということを思いました。

あと、山田先生のお書きになった「『雲の上』の話にしないために」の中でも、私たちがずっとこれまでやってきた、今後もこの方向性でやっていこうとしている少子化対策が、ある一部分の人たちをターゲットにしにかけていないのであるのであれば、やり方を考えなければならないと思うんです。私は、大臣になってから、もう子どもを産む世代の女性の人数が減っていくから、スピード感を持って少子化対策をやらないといけないということは度々言ってきました。だから、ある一部にしか光が当たらない少子化対策になってしまっているのだったら、早目に見直して、どういうところにどういうターゲットをして、どういう財源を投入していくのかということ冷静に考えていかないと、二極化をつくらないようにしようと思っている我々が、二極化をつくっていくことにならないかということを思いました。

勝間委員

一つだけいいですか。小淵大臣にお伺いしたいんですけども、政治家の皆さんって、私、若年層差別とかシルバー資本主義という言葉を使っているんですが、それをしているということの自覚がひょっとして余りないんですか。

小淵大臣

全体を一言で申し上げるのはすごく難しいのですが、やはり今の民間企業というのは、今大体30代、40代というのが主流で、強く意見を言えるようになってきているような感じでしょうか。

勝間委員

それでもないですね。40代とか、50代ですね、一番強いのは。

小淵大臣

政治の世界は今、60代、70代が第一線をやっていますので、そうすると、あの時代のあの考え方というのが、どうしても主流になっているような気がするんです。

今、少子化対策をやらなければいけないとか、絶対大事だと言ってくれる方は、たとえば自分の娘さんが仕事をしたい、子どもを持ちたいということでも困っているという方が多い。やはり自分の身の上で起こったことじゃないとなかなか実感しないというのが確かなことです。だから、そういう意味で言えば、お嬢さんを見て少子化対策の重要性を理解するようになったような60代、70代の方が多い中というのは、どうしても、今の政治の世界は、年齢のバランスがよくないということです。数が多い世代の声が強くなるというのは、いたし方ないところなのかなと思います。

佐藤委員

それでは、最初のお約束で、記者、マスコミの方からの御質問ということでお出しください。ちょっと何人ぐらいの方が質問ありますか。総量を把握したいので。2人でいいですか。

そうしたら、質問を簡潔に言っていただいて、どなたに対する、3人でもいいですし、この方と言っていただいて質問を出していただいてから、3人に、全部答えなくてもいいです、答えられるところで答えていただくという形でできればと思います。

では、最初の方。

傍聴者

山田先生にちょっとお伺いしたいんですが、少子化の対策メニューというのは、もう10年前から言っていることと同じで、何回もしゃべっているのに実現されないと。これは、もう政治がやる気がないということなのかなと僕なんかは受け取ってしまうんですけども、先生としては、そういう徒労感とかを感じられたりはしないんですか。

佐藤委員

では、後ろの方。質問を先に伺うという形にしたいので。

傍聴者

どなたでも結構なんですけれども、政策という面に移す場合のこういうアイデアあるのかなと思うんですが、住環境からのアプローチというのはあるんでしょうか。結婚をすると、引っ越しをして、子どもが生まれると引っ越しをしてと、必ずイベントごとに引っ越しを多分みんなするので、すごくお金がかかるのと、それもかなりな負担だと思うんですけれども、そっちサイドからのアプローチはどうでしょうか。

佐藤委員

あと1人ぐらい。いいですか、せっかくの機会。では、その方で最後といたしたいと思います。

傍聴者

先ほどのモテ度の話についてお聞きしたいんですけれども、今、そのモテ度で、モテ格差があって、そのモテ格差をなくす努力のお話をされていましたが、今ちょうどこういう時代で、経済が悪くなって格差是正ということが何かすごく大事なことだと言われていましたが、一昔前は、弱肉強食ではないですけれども、かなり昔の話ですが、モテる人間は、当然たくさんの女性とつき合っ、たくさん子どもを産ませる。モテないというのは、ある意味、男性としての魅力といったらおかしいですが、生存能力が低いということで、その遺伝子が淘汰されていくというのが、いわゆる昔から言われていた言い方だと思うんです。こういう価値観というのを変えていくのが、是正するのではなくて、その格差を認めるという方向に動くというのも一つの方法ではないかというような意見については、どう思われますか。

佐藤委員

それでは、お三方について、答えられるものはお答えいただき、あと、言い残されたことがあれば、それも含めて、それぞれ1分ちょっとずつぐらいで、済みませんが、山田さんの方から。

山田氏

まず、最初なんです、徒労感には確かにありますが、最近、厚生労働白書を見ても、事実はきちんと書いてあるんだけど対策は書いていないというようなことがありますので、多少は認識は深まってきたかな。ただ、結婚に関してはなかなか対策は難しいから出せないし、できないんだろうなと思いつつ、徒労感を多少味わいながら言い続けております。

住環境ですけれども、まさに日本の住環境というのは、とにかく、いわゆる正社員か自営業モデルであって、1回持ったらそこにずっと住み続けるというようなことを中心にあらゆるものが構成されているので、例えば、離婚した場合はどうするかとか、そういう柔軟なライフスタイル

に対応していないと。つまり、持ち家支援はあるんだけど、借家への支援はない。つまり、結婚していて正社員の人に対しては支援は手厚いけれども、結婚していない人たちには手薄いといったようなところと同じようなことがあると思います。今の雇用・結婚環境に合わせた住政策が必要だと思っています。

半分冗談で、昔の平安時代のように、通い婚で、パラサイトしながら、産んで、そこに入る。今、地方では結構それは多くなっているパターンなんですけれども、そういう一昨々日の「新婚さんいらっしゃい」でもそういうパターンがありました。そういうことも視野に入れた柔軟な、何が視野なんだろう、そういうことも含めた柔軟な政策が必要だと思っています。

モテ格差が難しいのは、お金は再配分できるんですけども、関係を再配分はできませんので、これは本当に、関係をつくる段階での能力をつけるということ以外に方法はないわけです。それは、社会の価値観というのは勿論ありますけれども、やはり私は、信頼できる関係を人は持った方が生きやすいであろうというような価値観は持っておって、多くの方はそれを共有していると思いますので、モテ格差をモテる前段階で解消することが必要だと思っています。

済みません、ちょっと2分ぐらいになってしまいました。

佐藤委員

お願いします。

三浦氏

住環境については、今の若い方は、結論から言うと、住環境の制約が未婚化・少子化を招いている割合は低いのではないかと私は思います。親が、大体持ち家を持っていることが多いので、今、先生がおっしゃったように、自分で買う力がなければ親元に住むとか、1軒空き家があるとか、そういう意味では、結婚すればしたなりでどこかに住めるのではないかと。ですから、どうしても私は夢のマイホームが欲しいのと言っている人は別ですけども、全体から言うと、今の若い人には、マイホームが持てないんだったら結婚はしないわ、子どもは産まないわという考えは余りないのではないかという気がします。

それから、モテ社会ダーウィニズムについては、そういう考えも、考えるのは自由なんですけれども、社会は、すごい優秀な人はそんなに数は必要ないので、むしろいろいろな日々の暮らしを支えている人がたくさんいないと動かないので、そういう人が、きちんと結婚して、子どもができて、ある程度安心して暮らせるというふうであってほしいと思います。

佐藤委員

では、最後になりましたが、金子さんお願いします。

金子氏

どれも大きな問題で、私のような者がコメントしていいのかわからないですけども、

政治の方でちょっとやる気がないのではないかという、これについては、今日の話全体として聞いてもわかるんだと思うんですが、やはり政治だけの問題ではなくて、社会全体の、いかに若い世代を全体として支援していくかというような大きな問題であるということが言えるのではないかと思います。

それから、住環境については、三浦先生が、少子化に関してそれほど大きな要素を占めていないのではないかと指摘されましたが、私の資料の6ページに図表15というものがございまして、こちらは、「結婚の障害」と書いてありますが、1年以内に結婚したいという意欲があり、かつ交際相手も持っているというような、かなり結婚に近い人の中で、それでは障害になることはありますかと聞いた結果なんですが、結婚のための住居というのは、ごらんのような位置にございます。結婚資金というのがかなり多くなりますが。特徴としては、男性も女性も、最近ほど職業や仕事上の問題がネックになっているというのが増えてきているというところがございます。

住環境、確かに山田先生もおっしゃっておられましたけれども、どんどん多様化していくこのライフコースに合ったものにしていかなくてはいけないのではないかというのは、そのとおりだと思います。

それから、格差の自然選択の問題ですけれども、これは、もう本当に私見ですが、自然選択というもののそういった制約から逃れてくるのが人間の文明と申しますか、社会をつくっているゆえんではないかと思うので、それに任せればよいというようなことは、ちょっと乱暴かなという気がします。

以上です。

佐藤委員

ちょっと時間がオーバーしましたけれども、どうもありがとうございました。

山田さんがこの少子化対策にかかわって、未婚化・晩婚化、結婚のところをずっと議論していてなかなか進まなかったというお話なんですが、私も政府のいろいろな少子化対策にかかわってきて、私もそういうことを言ってきたことがあるんです。多分、少子化対策で割合、つまりメインで取り上げたのは初めてではないかなと。時間を1回分割いて、それも最初に取り上げた。つまりそれだけでも相当、一歩前進。

もう一つは、金子さんが言われたように、これはかなり難しいんですね。数字ではわかるんですけども、ではどうするかというのはすごく難しいということで、今日は、皆さんも含めて、この問題が大事で、まずこの問題を理解してもらおうということがすごく大事だと思うんですよ。そして、若い人たちも含めて、やはり今のままでは、結婚したくても結婚できないというのが客観的にある。やはり何か踏み出さなければいけない。そのことをまず理解してもらって、では、その上で何をするか、これなかなか難しいので、これについては我々も少しずつ考えていきたいと思っておりますし、マスコミの皆さんも、是非そういう議論を、世の中で議論していただくということがすごく大事だと思いますので、是非その辺サポートしていただければと思います。

それでは、次回以降について事務局の方から御連絡いただければと思います。

川又参事官

ありがとうございました。

次回は2月24日火曜日、17時半からということで、場所は同じでここでございますけれども、次回は「若者の雇用と自立支援」をテーマといたしまして、次回は松田委員の御担当ということで、よろしく願いいたしたいと思います。

それから、本日は、この会議終了後、10分後ぐらいを目途といたしまして、今日まとめをいただきました佐藤先生の方から、簡単にまとめのブリーフということで、さっきもうちょっとまとめをされてしまったようなんですけれども、まとめのブリーフという形でこのフロアの会見室でございますので、御希望の記者の方、ちょっと10分程度お時間をいただいた後に行いますので、お待ちいただければと思います。よろしく願いします。

佐藤委員

それでは、一応ここで終わりということでいいわけですね。

では、どうもありがとうございました。ちょっと延びましたけれども、これで今日の会議を終わりにさせていただければと思います。

どうもありがとうございました。